

アーティスト・ランで運営されるオルタナティヴ・スペースの可能性 水戸のキワマリ荘の事例を通して

Writer

寺門 陽平 TERAKADO Yohei

筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士前期課程芸術専攻芸術支援領域 2 年

本研究は、日本のアートシーンにおける「オルタナティヴ・スペース」について着目し、場としての可能性について、研究を行うものである。筆者は 2009 年から茨城県水戸市にある「水戸のキワマリ荘」という名前のオルタナティヴ・スペースの一面を間借りし、展示スペースを運営している。本研究では水戸のキワマリ荘で行ってきた実践を中心事例として取り上げ、アーティスト・ランによって運営がなされるオルタナティヴ・スペースにおいて、主体性が重視される活動が行われることにはどのような意義があるのか、場の可能性を示すことを目的としたものである。

アーティスト・ランで運営されるオルタナティヴ・スペース

美術館やギャラリーと同様に芸術を扱う場所でありながら、そういった場所と代替、もしくは対抗する場としての性質をもち、1960 年代欧米からアーティストが自由な表現を行うことを目的として増加してきたのが「オルタナティヴ・スペース」という場所である。現在ではその運営形態、建築形態、運営者、目的等は多様化し、様々な活動展開をみることができる。その中でも日本のアートシーンにおいてアーティスト・ランで運営が行われるオルタナティヴ・スペースは、既存の社会システムやルールには属さず縛られないことから、新たな表現が生まれやすい場所としての特性をもっているといえる。また対象者が「アートに興味がある人」に限

定されないよう、設置された地域において場を開き、コミュニティスペースのような役割を果たしている地域住民との距離感が近いスペースもある。そういったことから芸術普及の場としての特性もあるといえる。このようにアーティスト・ランで運営がなされるオルタナティヴ・スペースは多くの可能性を秘めている場所ではあるものの、一般的に想起する芸術へのイメージとの差異や、オルタナティヴ・スペースが元来もっている既存の社会システムに代替・対抗するという性格、アーティストが在中または訪れるというたまり場の意味合いから、芸術に精通したものやアーティスト以外には訪れにくい特性である「閉じた公共性」をもつ場所でもある。

水戸のキワマリ荘の実践から

アーティスト・ランで運営されるオルタナティヴ・スペースがもつ可能性について考察を行うため取り上げるのが、水戸のキワマリ荘で行われた「キワマリ荘の写真部」「踊り子軍団山猫」「キワマリ荘ガレージセール」という三つの活動実践事例である。この三つの活動は、メジャーで大規模な動きではなくマイナーで小規模なもの、そしていわゆる写真教室であったりフリーマーケットであるなど、企画自体に特殊性はなく、行おうと思えば「水戸のキワマリ荘」以外の場所でも行える企画である。しかし、他の施設ではなく「水戸のキワマリ荘」という場で活動や企画が行われるからこそその差異、特殊性があ

る。三つの活動事例を通し水戸のキワマリ荘で活動を行うことは、既存の公共圏の構図（「踊り子軍団山猫」の事例でいえば主婦達が家事・育児等で表現ができないという社会構図にあたる）に「表現活動を行う主体性をもった活動者」（山猫メンバーである主婦達）が表現活動を行えるようオルタナティヴな公共圏をつくりあげる、つまり活動主体にあわせた流動的な場の運営によって表現活動を後押し、支援することが可能である。これは取り上げた三つの活動全てに共通している。このようなことから、主体性を重視した活動をアーティスト・ランで運営されるオルタナティヴ・スペースで行うことは、「社会化」していくということを前提として、表現意欲をもった人材を地域から拾い上げる、発掘・育成・促進という芸術普及的な可能性をもつのではないかと考えられる。また地域社会と芸術をとりもつ文化発信の拠点としての可能性もあると考えられる。



キワマリ荘の外観

アートマップ制作による地域アートの発掘 「大森アートマップ」制作を事例として

Writer

鳥山 裕加 TORIYAMA Yuka

筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士前期課程芸術専攻芸術支援領域 2 年

本研究は「大森アートマップ」の制作を通じ、制作参加者である住民の地域資源や地域芸術文化に対する意識を明らかにすることを目的とする。そして、アートマップ制作と「大森アートマップ」そのものが制作メンバーと「大森アートまちあるき」参加者の意識にどのような影響を与えたのかを検証し、今後の地域芸術文化の鑑賞支援に役立てられるよう、「大森アートマップ」の効果と課題を探る。なお、本研究における「地域アート」とは「『大森アートマップ』制作を通じ制作メンバーである住民がアートと考える地域資源や地域芸術文化を指すもの」とする。

はじめに

近年、各地で様々なアートイベントが開催され、地域芸術文化の活性化が盛んに行われているが、その中で住民の地域芸術文化に対する意識・関心は明らかにされにくい。それらを読み解く手段として、人間のイメージまたは想像力が介在したマップが有効であると考えた。さらに、市民の地域および地域資源に対する意識調査を行った先行研究も多数あることから、マップおよびマップ制作が住民の地域（または地域資源）への意識を明らかにするのに有効な媒体や手段であるといえる。

「大森アートマップ」制作の背景

「大森アートマップ」の対象エリアの大森がある大田区は、中小零細企業が集まる都内有数の工場地帯を形成しているほか、

池上本門寺や多摩川古墳群等の史跡文化財も数多く有し、文化的土壌が成熟した地域でもある。しかし、区民意識調査結果より、区民の地域文化に対する意識は高いとはいえない。それでも、近年では「多摩川アートラインプロジェクト」等のアートイベントが行われており、徐々に地域とアートが接近していく動きがみられ、大田区でも地域芸術文化振興の場が整えられてきているといえる。

地域住民と来訪者の「地域アート」に対する意識

「大森アートマップ」制作は「大森地域内外の人々にアートを通じて、大森の新たな魅力を発信すること」を目標に掲げ、始動した。制作活動期間は 2011 年 11 月から 2012 年 2 月までの約 4 カ月間で、30～70 代の男性 3 名、女性 3 名の計 6 と筆者で制作が進められた。本研究では制作過程でのフィールドワーク調査やインタビュー調査、アンケート調査を基に、制作メンバーと「大森アートまちあるき」参加者の「地域アート」に対する意識や関心の分析をした。

以上の分析結果から、制作メンバーは常にまちづくりを意識し、自分自身の意識を変化させる〈視点の転換〉を行うことで、まちなかの既存の地域資源に新たな価値付けしており、住民の生活文化そのものを「地域アート」と捉えていた。また、「大森アートマップ」は、「大森アートまちあるき」の参加者に対しても既存の地域資源や地域芸術文化について考え

るきっかけを与えた。アートマップの制作と完成した「大森アートマップ」は、制作メンバーと「大森アートまちあるき」参加者の双方に〈視点の転換〉を促し、さらには、大森における「地域アート」の新たな見方を生み出し、結果「地域価値再構築の効果」をもたらすことができた。また、特に、個人宅前のオブジェ等の「非公共性・非永続性・非開放性」の地域資源が双方に「地域アート」の意義についての疑問を投げかけ、受容されていくことが明らかとなった。

よって、マップ本来の機能を保ちつつ、「非公共性・非永続性・非開放性」と「公共性・永続性・開放性」のバランスを考慮し、まちの変化にその都度対応しながら情報の更新と蓄積を継続的に行っていくことが今後の制作の課題と考える。



大森アートマップ